

翼に思いを 3度目の夏

「鳥人間コンテスト」27日出場

広島工業大

26、27日に滋賀県彦根市の琵琶湖で行われる「第47回鳥人間コンテスト2025」（読売テレビ放送主催）の滑空機部門に、広島工業大（広島市佐伯区）の人力飛行機部「HIT Sky Project」が出場する。2017、23年に続く3度目の挑戦で、17年にマークしたチーム記録（22・08分）の更新を目指す。（小山舞）

6月中旬、顧問の宇都宮浩 10人の部員たちがコンテスト司准教授(61)が見守る中、約 10分で披露する機体の調整作業を



機体について話し合う（左から）宇都宮准教授と戸花さん、榎さん、重見さん（いずれも広島市佐伯区で）

行っていた。ヒートガンを使い、主翼の骨組みをつなげるための金具を固定したり、水準器で主翼の角度を測ったり。設計責任者で、同大大学院工学系研究科2年の重見昇吾さん(23)は「100分以上飛ばしたい」と意気込んだ。

鳥人間コンテストは、全国の学生や企業の技術者らが手作りした人力飛行機が琵琶湖上空を舞う、夏の風物詩のイベントだ。飛び立った勢いと風の力を利用して飛ばす「滑空機部門」のほか、コックピットのペダルをこぎ、プロペラを回して飛ばす「人力プロペラ機部門」がある。機体の設計図などの書類審査を経て出場チームが決まり、今年滑空機部門に17チーム、人力プロペラ機部門には14チームが出場する。

同部は17年に初出場し、22・08分を記録した。だが、23年は風にあおられて5・75分に終わった。現在のチームの代表で、2年前にも在籍していた同大大学院工学系研究科1年の戸花裕貴さん(22)は「宇都宮先生の悲しそうな顔



コンテストに向け、翼の強度を確かめる部員ら―宇都宮准教授提供

が忘れられない」と振り返る。

「17年の記録を超える」と部員たちが口をそろえる今回、「低翼・非対称機」という歴代の機体の特徴を生かしつつ、風による失速を防ぐため、新しい工夫も施した。重心を前方に移し、翼の設置角度を緩め、「ボルテックスジェネレーター」と呼ばれる突起もつけた。パイロットが乗り込みにも失敗しないよう車輪も設置。パイロットの工学部4年、榎一馬さん(22)は「機体を支える人との連携を取りながら練習していきたい」と本番を見据えた。

滑空機部門は27日に行われ、鳥人間コンテスト公式YouTubeチャンネルでライブ配信される。